

フランスの思想家 メルロ＝ポンティにならない 興味の向くまま 幅広い分野を対象に研究

理工学部／人文・社会学教室

加賀野井秀一 教授

Shuichi Kaganoi

近年では日本語論の専門家としてテレビや新聞などに登場する機会が多い加賀野井先生だが、大学はフランス文学科出身。フランスの思想家メルロ＝ポンティの研究から端を発し、現代思想研究から言語学研究へと範囲を広げ、現在ではメディア研究にも精力的に取り組んでいる。ここでは、理工学部でフランス語や言語学などを担当している加賀野井先生の半生を、とくに少年時代から学生時代までに重点を当てて振り返ってみよう。



転校の繰り返しによって 多様な世界を相対化して 考える能力が育まれた

高知新聞の記者だった父と専業主婦の母との間に長男として生まれた加賀野井先生。当時の新聞記者は無頼漢なのが当たり前で、父親も夜遅くに酔っ払って帰宅したり、突然知

人を連れ帰ったりすることも多かったとか。また職業柄転勤が多く、そのたびに転居する生活を送っていたため、加賀野井先生自身はさまざまな世界を見聞する機会に恵まれ、非常に刺激的な少年時代だったと振り返る。

「幼稚園に入るころに東京のど真ん中に転居したときは、周囲にアメリ

カ大使館などもあり、そこで暮らしているだけでカルチャーギャップの連続でした。その後、小学校2年のときに高知に戻ると、今度は田舎町なので再びカルチャーギャップがあるわけです。小学校5年の2学期には、今度は大阪へ転校しました。多感な中学生時代を言葉も文化もまるで異なる場所に放り込まれて過ごし

た後、高校時代にはまた高知へ逆戻り。このような転々とした生活を繰り返していくうち、自然に世界を傍観者的に見つめる習慣が身についたように思います」

まわりからはいつでもおしゃべりで明るい性格だと思われていた加賀野井先生だが、心理テストを受けると必ず全校で一番内向的だという結

果になり、友人たちから訝いぶかられた。それもそのはず、実は加賀野井先生は意識的に外向的な振る舞いをして、自分自身を演出していたのである。

「私は二重人格的な人間で、本当は内向性が強いんだけど、まわりからは明るい性格に見えるように行動していました。いろいろな文化を目の当たりにしてきたので、自分自身を客観的に見つめ、コントロールする能力が知らず知らずのうちに育まれていたんですね。」

もともと、転校ばかりしていると言苦勞もたくさんありました。例えば高知に戻って入学した土佐高校は、当時から中高一貫教育をおこなっている名門高校で、中学時代までに数学Iを履修し終えていたのです。ですから大阪の中学校からやってきた私は、いきなり数学IIから始めなければなりません。その影響が未だに尾を引いていて、数学には苦手意識が残っているほどです。自分なりに環境の変化に適應するために努力をしましたが、なかなか厳しかったですね」

転校が多いと仲良くなった友人ともすぐに別れがやってくる。転勤の多い父親に対して不満を持ったこと

も多かった加賀野井先生だが、やがてこのような環境を自分の宿命として受け入れられるようになった。今振り返れば、自分にとって大いにプラスになったとさえ感じるという。

「私は他の人よりも子どものころから、世の中にいろいろな世界があるということを経験して育ちました。そのおかげで、さまざまな事象を相対化して考えられる能力を身につけることができました。文化を相対的に見つめたり、自分を客観的にとらえたりできるようになったのは、少年時代の経験の賜物だと思います」

フランス狂いの父親の影響で フランス文化や哲学に 興味を抱くようになった

加賀野井先生が大学受験をめざしていた1960年代は、サルトルの実存主義などが大学生に強く支持されており、「実存主義とは何か」といった和訳本を、表紙が見えるように小脇に抱えて歩くのがカッコイイと考えられていた時代だった。そんなとき、高校のある先輩の言葉が加賀野井先生の心を貫いた。「今どき、まだサルトルなんて読んでるの。も

かがのい しゅういち
1950年、高知県生まれ。1969年土佐高校卒業。1973年中央大学文学部フランス文学科卒業。1983年中央大学大学院文学研究科仏文学専攻博士後期課程満期退学。その間、フランスに渡り、パリ大学大学院で学ぶ。中央大学理工学部助教などを経て1998年中央大学理工学部教授就任。現在に至る。専攻はフランス文学、現代思想、言語学。主な著書に『20世紀言語学入門』『日本語は進化する』『メルロ＝ポンティと言語』などがある。





つとすごい哲学者がいるんだけどね!」。

「そのような経緯で知ったのが、メルロ＝ポンティというフランスの思想家でした。しかし、当時は哲学といえばドイツが主流だったので、大学で哲学に進めばカントやショーペンハウエルを中心に『ナントカのナントカ』におけるナントカのナントカはナンゾヤ』みたいな学問を極めなければなりません。さらに言えば、当時の哲学にはメルロ＝ポンティを研究している先生もほとんど

いませんでした。そこで哲学科に進むのをやめ、なんでも自由にやれそうなフランス文学科に方向転換したのです」

加賀野井先生は哲学や心理学といった学問を幅広く学びながら、フランス文化や思想面にも触れたいと考えていた。その背景には、父親からの影響が大きかったという。

「大正生まれでいわゆるインテリ職業に就いた父のような人たちのなかには、フランス狂いがたくさんいました。父は往年のフランス映画にも造詣が深く、ジャン・マレーやジャン・ギャバン、ジェラルド・フィリップなどの主演映画をよく観ていて、小さいころからよく話を聞かされていました。その後、私自身も何回目かのリバイバルで鑑賞する機会があり、徐々にフランスにあこがれを抱くようになったのです」

今でもフランス映画が好きだという加賀野井先生。アメリカ映画がエントテインメントとして行き詰まりをみせ始めている一方で、現代のフランス映画には往年の作品にみられるような思想や人生が込められている点に、大きな魅力を感じているのである。

大学から締め出された 学生たちが喫茶店に集まって 互いに議論をぶつけ合った

受験を突破し、いよいよ大学に入ると、そこは学園紛争のまっただ中だった。ちょうど東大の受験がなかった年で、中央大学でもたびたびロックアウトが実施され、シャッターが降りて大学に入れてもらえない日が多かった。そんなとき、大学の近辺で所在なく「どうしようか」とウロウロしていると、他にも大学から締め出された学生がたくさんいて、徐々に仲間になっていった。

「かつてお茶の水にあった中央大学のすぐ近くに『丘』という名の喫茶店がありまして、よくみんなだむろして政治談義や思想談義をしていました。人生とは？ 青春とは？ などという根本的な問いかけもお互いにして、ときには傷つけ合うくらいにやり合ったこともありました。会ったり話したりするたびにお互いが辛くなるような関係の仲間もいたけれど、感化され、乗り越えていくという厳しい人間関係のなかで学生時代を過ごすことができたのは、今思えば大きな財産になったと

思います」

当時の大学は、授業がなくても総合教育の場であった。学生たちは自主的に議論をおこない、先生方も学生の熱意あふれる問いかけに対して積極的に対応しようとしていたのだ。「今の学生たちは、環境に恵まれ過ぎていて少しかわいそうなのがします。私の学生時代と比較すると、学生同士も先生との関係も分断されているように感じます」

そんな加賀野井先生だが、学生運動では反戦デモに参加して催涙弾を浴び、涙がぼろぼろ出て止まらなかつた経験もしている。もともと、徹底的なラジカル派にはなりきれなかつたようだ。フランス思想を学んだかなりラジカルな人間にはなつたが、子供のころに育まれた性で、まわりをちよつと見てから行動することが多かつたからである。

加賀野井先生には、反戦集会にまつわる苦い思い出がある。

「これからデモに行こうというとき、周囲はヘルメットで身を固めているのに私は普段着だったので躊躇している、両側をヘルメットの連中が囲んで守ってくれると言うんですよ。これは非常に頼りになるな、団

結心が固いなど思っ、信頼していつしよに機動隊の方へ突き進んでいったわけです。ところがどんだん行くうちに、まわりが少しずつ弱腰になってきた。徐々にバラバラになって、気がついたら歯が抜け落ちていくように散開していったんです。最後まで信念を持ってまっすぐ行進していたのは私の他にほんの数人。そんな状態で盾を持った機動隊がズラリと並ぶ姿を目の当たりにし、さすがに慌てて逃げましたけど、そのとき以来私は日本人同胞を信頼できなくなりまして……」

それが原体験となつて、「たとえ一匹羊になつてもいいから徒党を組んで行動するのをやめよう」と決めた加賀野井先生。その人生観は今も、そしてこれからも揺るがないのではないだろうか。

幅広い領域をカバーしている メルロ＝ポンティに感化され 自らも広範な分野を研究

加賀野井先生が進学した当時、メルロ＝ポンティを研究する資料は大学にそろっていなかった。そこで同じ思いの仲間たちと「メルロ＝ポン

ティを学ばせろ!」と声を上げたところ、先生方も協力してくれて、いつしよに学問を築き上げることができたそうのだ。「フランス文学科では、文化面に対する理解も深く、私たちのような学生の無理な注文にも先生たちは一生懸命に応じてくれました。今も私の研究はメルロ＝ポンティが中心になっています。フランス哲学を中心としたフランス文化といったところですね」

加賀野井先生に言わせると、メルロ＝ポンティとはまれにみる柔軟な思想家なのだとか。哲学という学問には非常に固いイメージがあるが、メルロ＝ポンティは著作のなかで心理学や言語学、さらには音楽や美術といった芸術方面にも触れていて、人間味あふれる哲学を展開しているというのだ。

加賀野井先生は研究の中心が他の分野にそれればばらくメルロ＝ポンティを離れることも少なくないが、その後再びメルロ＝ポンティに戻ると新しい発見があるという。何度読み返しても、そのたびに深い味わいがあるという。

加賀野井先生は最近、ユニークな

発想で新しい分野へも手を伸ばしている。日本語論である。

「フランス研究をしてフランスで過ごす日々が多くなると、日本に帰ってきたときに逆カルチャーショックといいますか、日本のすばらしさも悪さも以前より強く感じるようになりました。そのうち、日本語というものをも強く意識するようになりまして、現在ではその関係の著書を3、4冊出版しています。現在、たまにテレビなどのメディアからお呼びが

かかることがあります、そのほとんどは日本語論の分野となつていきます」

現在ではメディア学との関係性の中で、メディアを中心とした言語論を展開している。この手法は、フランス現代文化思想におけるメディアオロジと連動したものだそう。担当している授業でも、言語学、哲学、文学、メディアについて講義をおこなっている。だんだんと研究の幅が広がっている。これもメルロ＝ポンティの思想の影響に違いない。

加賀野井先生は、現在の日本を「異様な社会」と形容する。一人ひとりが別々のタコ壺に入っているような閉塞的な社会である一方で、マスコミを通じて入ってくるコマーションリズムに対しては、一括的に行動を左右される傾向をかき取っているからだ。

「これからの若い方々には、自分自身で考えたり行動したりできる能力を身につけてほしいですね。そのためには、世間で当たり前だと思われていることもまずは疑ってみることが大切。周囲に流されず、独立独歩の精神で人生を歩んでほしいと思います」



日本語論の専門家としてテレビにも出演